

東西の靈魂のとらえ方のちがい 半田栄一

於（公益財団法人）日本心霊科学協会

靈魂や靈界についての、とらえ方は、洋の東西において異なるが、その差異について考えると同時に、その共通するところについて考える必要がある。

明治以降の、わが国の哲学研究は他の諸学と同様にヨーロッパの哲学を中心に導入し、この習得と研究が行われてきて、昭和に至り、日本の思想的土壌の上に、西田、和辻、田辺といった、日本独自の近代哲学の一定の果実を得た。

現代の世界情勢の中で、いまや単純な「西洋」と「東洋」という二分法だけではなく、中近東；アラブやイスラエル、西洋化される以前のインド、北米、中南米、アフリカにおける「哲学」も考えられなければならない。こうした視点で哲学が論じられる「場」として、日本が位置しているところは最適なのである。

今後、世界哲学を考究しつつある中で、理性や悟性、知性だけではなく、身体性、感性、靈性をどのように考えていくかということは、大きな問題である。

近代ヨーロッパから始まり、世界を支配したのは、二元対立的なデカルト的理性主義であり、中世的宗教からの脱皮であり、自然科学に基づく、近代主義をもたらしたが、これは同時に唯物論的科学的発展につながっていった。ニーチェの「神は死んだ！」も、こうした状況下から出た言葉だ。

19, 20世紀の科学技術の発展は「科学信仰」の時代をもたらした。自然科学で実証することができない事象；「神秘的現象」、「心霊現象」、「神仏の力」、「奇跡」などは、すべて迷信として排除し、否定するようになった。この「実証主義」が、近代の時代精神となった。この19, 20世紀の科学実証主義が、近代の時代精神となった。

明治期、わが国において科学教育が推進され、漢方、鍼灸など伝統医学が排され、西洋医学中心の医療政策がなされた。

こうした中で、科学的迷信に陥らず、中正な「批判精神」で迷信打破を行ったのは、東洋大学の学祖、井上円了である。哲学的立場からの彼の批判は、「妖怪学」として著作となっている。

「科学主義」の時代に「迷信」として排除されたものが、

やがて形を変えて現れてくる。それが「スピリチュアリズム」であり、「心霊科学」であった。「ハイズビル事件」などの「心霊現象」や「テーブルターニング」などによる「霊」との交信、「霊媒」による「霊信」、多様な社会的事象が起こった。

日本でも、平田篤胤は、その国粹主義的神道思想によって明治維新の尊皇思想の原動力となったが一方で、『仙境異聞』、『霊能真柱』などによって、再生、死後の魂の世界、について論じているが、同時に、キリスト教や西洋の科学についても考究し、その影響を受けていたことなどは、彼の神道説と共に思想的深みが知られる。

明治以降「心霊科学研究」が行われるが、日本の「心霊研究」における平田篤胤の影響は少なからずあり、神仏分離令以降の国家神道や教派神道諸派、大本教をはじめ神道系新興宗教にも大きな影響を与えている。

洋の東西共に、ほぼ同時期に、社会現象として「心霊現象」が起こり、「心霊科学」の研究が始まり、「近代スピリチュアリズム」が様々な形で現れてくる。日本では大本教などの霊術型宗教や霊能者、霊的治療などが明治、大正、昭和の初期

に数多く現れてくる。こうした宗教社会学上の現象は、科学的合理主義に覆われ、抑圧された「基層的」な宗教意識、あるいは民間信仰レベルの非合理的な意識が、別の形をとって噴出してきたといえる。

心理学や医療の領域でも、デカルト的二元論、機械論的人間観、唯物論に基づく、心理学や精神医学から、ゲシュタルト心理学をへて、やがてフロイドやユングの深層心理学や精神分析へと発展する。

ユングの「集合的無意識」は、「宇宙的無意識」とも言うるものであり、仏教の阿頼耶識とも言うるのであり、「唯識」の世界、仏教的な「靈性」にも通ずる。

「靈性」については、鈴木大拙が『日本的靈性』を書いて、主として禅と浄土を中心とする鎌倉新仏教の評価において、彼の「靈性」が述べられている。神道、国家仏教としての最澄の天台宗、空海の真言宗は高められた「靈性」には至っていないという。鈴木と同時代人である西田幾多郎は、その「純粹經驗」により、鈴木に与えた影響は少なからずあったであろう。

西田はアメリカの哲学者ウィリアム・ジェームズの影響を受けており、鈴木は妻ビアトリスの「神智学」の影響を受けている。

フロイドとユングの深層心理学、精神分析は、その後マズローの人間性心理学、ケン・ウイルバーなどのトランスパーソナル心理学に発展していく。

また、身体の医学も人間機械論に基づく、唯物論的医学によってとらえていたが、ハンス・セリエのストレス学説を経て、心身の相関性から人間の生理や病気を捉える「心身医学」に発展した。

こうした「心身の一体性」をとらえる「心身医学」は、東洋的心身観と通じている。東洋的心身観では、心・身・霊が一体であり、禅や密教の修行では、坐禅、阿字観などの身体技法、呼吸法、瞑想法では、その一体性が求められる。天台の「止観」に基づく、禅の「数息観」、「心身一如」がこれである。

ギリシャの理性主義的超越論、プラトンのイデア論、アリストテレス哲学は、キリスト教神学の超越神を、理論づけた

が唯一絶対の超越神を抱く、キリスト教は、ヨーロッパの哲学と文化・文明に大きく影響したことは、いうまでもない。ギリシャの、そしてユダヤ教、キリスト教が発生した、パレスチナの「風土」が生み出した「霊性」にもとづくものである。

新プラトン主義のプロティヌスは、一者との合一を説くが、インドのヨーガにおける「梵我一如」の影響があろう。中世のヤーコブ・ベーム、エックハルトなどの、神秘主義者たちも、瞑想によって神との「合一」がめざされる。

ここに西洋の霊性と東洋の霊性とが、通底するところがある。三位一体における、「聖霊」信仰は、父なる神と人性（イエス）をつなぐものと言えよう。カトリックのマリア信仰は、キリスト教がヨーロッパに流入して、それ以前の基層信仰としてのゲルマン人の大地母信仰が、形を変えてキリスト教の中に残り、現れ出たものといえる。キリスト教と原ヨーロッパの霊性との合流ということができる。

ユダヤ、キリスト教の父なる神は、唯一絶対の超越的人格神であった。その前にひれ伏す人は「個」として存在する。

地上に生きるときも、死後神の前にあるときも「個」として存在する。ペルソナとしてある。

東洋では、「個」を越えて、「一」をめざす。「共生」がいわれている現在、もし、日本的靈性を世界に示すことができるものは、靈的世界でも、対立・分断や「個」の主張ではなく「融和」、「融合」、「一致」である。究極的には、人類的な靈的一体性をも越えて、神性に近づく。

この西欧的「個」のあり方と、日本的「融和・抱擁性」の統合が今求められている。河合隼雄などの、ユング研究者の論著は示唆的である。

日本のスピリチュアリズムでは、「敬神崇祖」に重きが置かれるが、家系の先祖の靈、遠つ御祖は、神に至る。先祖の祀りも家族や一族、地縁の集団で行う。さらには天皇・皇室を中心とした民族・国家の集団。類魂というとらえ方は、日本ではきわめて受け入れやすいであろう。神と人は、連続性において捉えられ、断絶・超越性はなく、神に裏付けられ、抱擁されている。人の靈は、同一類魂内で、必要に応じて「再生」を繰り返し、「浄化向上」していく。